

雑音帖 No. 1 2017.8.20. ～「蘇音カフェ」の試みから～

瀬野豪志（蘇音）

6月から「十一人劇場」で、レコード、放送、映画などの音声を聞きながらおしゃべりする「蘇音(そおん)カフェ」を始めています。これまで vol.1「まだ戦後だったころ(1945-1955)」、その続編「もはや戦後ではない」、vol.2「東京オリンピック」というテーマで開催しています。

「蘇音」という名前は、1877年にトーマス・エジソンが発明した録音再生の機械「フォノグラフ」が日本では「蘇言機」や「蘇音機」と紹介されていたことにちなんでいます。また、二つの「よみがえる音」の意味で使っています。一つは、音声を「復刻する」。録音された「音声」を資料として扱い、調査し、それをもとにした研究や制作を行うということです。もう一つは、「再生音」。いわゆる「再生音」の科学技術についての歴史研究や実態調査を行うこと、そして「再生音」を使った制作を行うということです。

音を紹介する「雑音帖」の第一回目は、「蘇音」についての紹介をしながら、それに関連する音声も紹介しましょう。

1. 資料としての「音声」

復刻する - よみがえる音を聴く

レコードやカセットテープとともにCD（コンパクトディスク）が店頭に並んでいた頃、CDはレコードの倍くらいの価格だったように記憶していますが、わたしはCDプレーヤーを持っていないうちからCDを買っていました。CDはきれいな音で長持ちするらしいから、将

来のために買っておいでもいだろうという、今からすれば妙な考えですが、「半永久的」に保存ができると考えてCDを買い始めました。

そのうち、輸入盤ではCDが安く買えるようになり、国内盤のCDでも「再発盤」が輸入盤と同じくらいの価格に下がり、その頃にはもちろんCDプレーヤーで聴くために「再発盤」のCDをたくさん買うようになっていました（「海賊盤」のことではありません）。価格の差もありましたが、「新譜」は期待が膨らむ反面、聴いてみるとがっかりすることも多かったのに対して、「再発盤」は貴重な作品や名作ばかりですし、多くのことがわかるようになり、自分にとっては新鮮な音だったということもあります。店頭でも「新譜」と同じように過去の作品をCD化した「再発盤」がたくさん並ぶようになると、それらを「古い」作品としてだけではなく、「新鮮な」音としても聴くようになっていました。

また、どうしても聴きたいがために高額の中古レコードを買っていたのに、しばらくして「再発盤」のCDが出るということもよくありました。どういう内容なのかを知りたいだけなら、安い価格で再発されたCDがあれば十分ですし、レコード屋の店員さんや友人に聴かせてもらえばいい。記録された「音声」を聴こうとするのは、レコードやCDを所有したり保存したりするのはかなり異なることです。それは、その「音声」を聴いて初めて何かに繋がっていくようなことを求めています。

録音作品の「再発」は、レコードの規格が変わったときも、レコードからCDにか変わったときも、現在の「デジタル化」でも繰り返されていますが、録音作品の流通のための記録メディアの規格が変わるということは、それらの音声聴こうとする者からすれば、埋もれていた「音声」が新しいメディアで再発されるかもしれないという、「復刻」の機会でもあります。同時に、新しいメディアに「復刻」されないままであれば、それまでの「音声」の記録は、聴くことができないうまま、埋もれてしまうことにもなります。

デジタル化

レコード、フィルム、磁気テープ、そして、音声ファイルへと、音声を記録してきたメディアの変遷とその多様性は、音声を資料として扱う上で、深刻な問題をもたらしています。それらの記録メディアをきちんと保存していたとしても、記録されている音声を聴くことができなければ、その音声は誰にも知られないままです。つまり、記録メディアがモノとしてあっても、音声を再生して聴くための方法がなければ、よみがえる「音

声」を資料とすることはできない。そのため、再生するための機材や知識がなくなってしまう前に、互換性のあるメディアや新しいメディアに記録し直すことが必要になります。そうすることで「音声」は継承され、「音声」が資料として活用できる形で保存されることとなります。現在、録音のメディアに記録されている音声を「デジタル化」する作業が進められていますが、音声ファイルも現在のフォーマットでの再生環境に依存しているので、「音声」を資料として保存するための方法はまた変わるかもしれません。

サウンドアーカイブ

エジソンの「フォノグラフ」の発明から今年で140年となり、これまでの様々なメディアに記録されてきた「音声」は、歴史的な資料として扱われる可能性があります。これまでの「音声」とともに、これからの「音声」もデジタル化されることによって、音声ファイルの「サウンドアーカイブ」においては、それらの「音声」は聴かれうるものとして整理され、並べられていきます。「サウンドアーカイブ」は、1969年に設立された、International Association of Sound and Audiovisual Archives (IASA) という組織があるように、音声の記録メディアの保存に始まり、現在はデジタル化による音声ファイルへの「置き換え」や「復刻」のための役割が増えています。インターネットが普及してからは、ウェブ情報を集めることから始められたインターネット・アーカイブ (Internet Archive) でデジタル化された音声も保存されるようになり、ウェブサイトで聴くことができるようになってきました。日本では、デジタル化による「サウンドアーカイブ」として、国会図書館の「れきおん」があります。NHKでも、NHKアーカイブス、戦争証言アーカイブスなどのデジタルアーカイブがあります。

しかし、デジタル化による「サウンドアーカイブ」には、多くの課題があります。音声の記録メディアを所有している図書館や放送局に「デジタル化」を任せておけばよいかというと、そうでもありません。デジタル化のような変換の作業で完了するのではなく、どのようにその音声を聴くことができるのか、誰がその音声を資料として扱うことができるのかという利活用の問題があります。また、音声を聴くだけでは内容がわからないということもあります。特に、日本では「戦前」の音声を理解することは難しくなっています。今後、音声資料については、デジタル化だけでなく、あらゆる角度からの研究成果が蓄積されていく必要があります。そのためには、音声資料が公開され、サウンドアーカイブとしての利用であれば誰しも音声にアクセスできることが前提となります。技術的には、ストリーミングで「聴く」ことができればいいのではないかと考えますが、

音声記録を作品とする著作権と音声を資料として「聴く」利活用との関係について、言い換えれば「サウンドアーカイブ」としての音声資料の利活用について、まだ明確には区別して考えられてはいません。現状では、図書館での「複製」つまり保存のための「デジタル化」の変換作業まではできるものの、その音声を資料として聴くための利活用については、館内かインターネットかの問題として処理されてしまいがちで、まだ議論の余地が残されています。

民間のサウンドアーカイブ

図書館や放送局は、多くの記録メディアを保存している機関であり、音声についての優れた調査研究の成果を生みだしています。しかし、資料として復刻された音声を「聴く」ことも一部の人にしかできないならば、それらの音声を資料として扱う研究は、他の研究者によって継続されないうちに、絵を見せることなく絵の説明をするようなものとなり、専門的な学術的研究としても検証されにくいものになってしまいます。また、「音声」の資料は、レコードや放送に限りません。カセットテープを利用した、研究、取材、講演、証言、通話、メッセージ、家庭生活の記録などもあるでしょう。そうしたレコードでもなく放送でもない「音声」を資料として扱う活動は、民間のサウンドアーカイブへと発展していく可能性があります。NHKでも、「番組発掘プロジェクト」として、視聴者からの記録メディアの提供を求めているくらいですから、貴重なレコードや放送番組などは、図書館や放送局へ提供するのが良い場合があるかもしれませんし、そうした主要のサウンドアーカイブへの窓口もあるといいのではないかと思います。繰り返しますが、サウンドアーカイブは、レコードや放送音源を収集して保存すればできるようなものではなく、誰もがその「音声」を聴くことができるように復刻し、それがどのような音声であるのかについての研究調査に基づいて、その内容や背景を理解できるように将来の世代に継承するためのものです。言い換えれば、資料としての音声は、亡き人の声を生きているかのようにみんなで聴くことができるというものです。カセットテープのサウンドアーカイブは、図書館や放送局とは異なる音声を聴くことができる場にもなりうるでしょう。民間のサウンドアーカイブは、エジソンの「フォノグラフ」が人類学や民族音楽の研究に使われたように、オーラルヒストリーや証言の記録として、様々な形で構築されるのではないかと思います。

2. 「再生音」とは何か

再生音の科学技術 - よみがえる音の機能

わたしたちは「スピーカ」から発せられる「音声」に囲まれて暮らしています。目覚ましの音で起き、テレビをつけ、PCを起動し、駅でアナウンスを聞いて歩くように、あらゆる場面で声や音楽を耳にしています。機械（スピーカ）から人の声や音楽が聞こえてくるという意味では、「再生音」の歴史は「テレフォン」に始まります。それまでの電信の信号音との違いは、機械を通した音が「声」や「音楽」として聞こえるということにあります。1876年にベルが発明した「テレフォン」からの声を聞いたブラジルの皇帝ドン・ペドロ（Don Pedro）二世は「おお、しゃべってる（My God, it talks!）」と驚いたと言われています。また、1877年にエジソンが発明した「フォノグラフ」は、その場で録音して再生してみせるという実演によって知られていたものであり、日本では人間の言葉をよみがえらせる機械として紹介されていたことが伝えられています。こうした話には多少の脚色が加えられているとしても、機械から声や音楽が再現されて聴こえてくるといふ「驚き」が歴史的に印象付けられてきたことは、その「再生音」なるものがそれを聴く人々のいかなる欲望とともに存在してきたのか、また、わたしたちは生活においてそうした「声」や「音楽」とどのように関わってきたのかについての示唆を与えます。

「初めて」の音

初めて「再生音」を聞いたときの「驚き」というのは、新しい科学技術によって実演されている音だけでなく、聴取者が「実演されている何か」を感じていこうとする姿勢によるものでもあります。音声の「人間らしさ」が多少笑ってしまうようなものであっても、「人間らしい！」と積極的に喜んでしまうゆえの社会的に作られる「驚き」というものもあります。エジソンが「メリーさんの羊」を吹き込んで再生したという話が知られていますが、残念なことにその「音声」を再生したとされる錫箔は見つかっていません。つまり、エジソンの「メリーさんの羊」は聴くことができる音声の資料としては残っていないわけです。トーマス・エジソン国立歴史公園（Thomas Edison National Historical Park）のウェブサイトによると、最も古いエジソンの声は、1888年の録音によるものとされています。

<https://www.nps.gov/edis/learn/photosmultimedia/very-early-recorded-sound.htm>

エジソンは、1927年に発明50周年を記念して「メリーさんの羊」を初期のフォノグラフで再生する実演をして、その時の録音とされる「メリーさんの羊」の音声が残っています。

<https://archive.org/details/EDIS-SCD-02>

この音声も、エジソンの「メリーさんの羊」がどのように再生されてきたのかという観点から考えると、「再生音」の歴史において繰り返されてきた、「初めて」の音や「肉声」の一例として捉えることができます。面白いことに、First Sounds というサイトでは、現在聴くことができる「最も古い」人間の声は、エジソンの声ではなく、「フォノトグラフ (phonautograph)」を発明したレオン・スコット (Édouard-Léon Scott de Martinville) の声ということになっています。

<http://www.firstsounds.org/sounds/Scott-Feaster-No-36.mp3>

これは1860年頃に記録された「波形」をもとにして現代の技術によって150年後に再生されたという「音声」ですが、このようにして「初めて」の声は、様々な観点から書き換えられ、現在も再生産され続けています。

最も古い「日本人」の声も、よく話題になっている「音声」資料で、現在のところ、1900年パリ万国博覧会で録音された「音声」ということになっています。万国博覧会での録音という「再生音」の驚きもあつたのではないかと思われる音声です。この博覧会での録音による音声がいくつかあるためにそれらの前後関係はよくわかっていないようですが、フランス国立図書館 (BnF) の電子図書館「ガリカ (Gallica)」で、レオン・アズレーによる録音の「音声」を聴くことができます。

<http://gallica.bnf.fr/html/und/asia/cylindres>

こうした「初めて」の音は、厳密にはどれが「初めて」であるのかということをも多くの人に考えさせます。しかし、蘇音の研究としては、「初めて」の音がなぜこれほどまでに気になるのか、それが音響の科学技術の進展においてどのように関わってきたかのほうが重要ではないかと考えます。

サウンドスタディーズ

「再生音」や「サウンド」についての研究というと、録音や音楽についての技術的な分野の研究かと思われるかもしれませんが、専門的な著作でなければ、まだ一般的には工学的な教科書やオーディオマニア向けの雑誌などが目に付きやすいのは確かです。しかし、20世紀の音楽を考える上で音響技術を利用した側面は無視できないことや、騒音の捉え直しに始まるサウンドスケープ論、電話会社を中心にして実用化されていった音響技術の構造と利用者の文化についての科学技術史のように、音響技術に関わる利用者、聴取者、住民などの聴取のあり方についての関心が様々な分野から深まってきたことによって、音響技術と文化・社会との関わりを研究する「サウンドスタディーズ」や聴覚文化論の新しい研究成果が現れてきています。ジョナサン・スターン『聞こえる過去～音響再生産の文化的起源』（原著2003年、翻訳版2015年）は、最も重要な著作の一つです。

「再生音」は、レコードを使った音楽産業の富をもたらしただけでなく、通話、医療、交通、放送、劇場、補聴器、警備といった様々な技術として使われています。このような「再生音」の技術は、例えば、「時間」、「家族」、「参加」、「情報」、「プライバシー」などのように、再生音を利用する生活のあり方をデザインしています。なぜなら、電話による通話というものが回線や機器だけでなく二人以上の人間を含んで成り立つように、再生音の技術には必ず二者以上の人間の立場が組み込まれているからです。このように人間が組み込まれている「再生音」の技術が成り立つには、利用する者が「再生音」になんらかの魅力や価値を感じて関与することが重要です。例えば、「人間らしい」音を喜んで聴くということが「再生音」を聴く生活においてどういう意味を持っているのか、ということが重要ではないかと考えます。

サウンドスタディーズによって見えてくることの一つは、「再生音」を利用する者も音響技術のあり方に深く関与しているということです。音響の科学技術から発展してきた「通信」「管理」「情報」「規格」などのような、もはや音が鳴らない技術の「システム」に依存している現代の生活についても、利用者の立場から関与することによって、民間の「サウンドアーカイブ」のように、従来とは違った技術システムにつながることもあるのではないかと思います。

次回以降も、聴くことができる「音声」を紹介しながら、音についてのお話しをします。

◆資料◆

蘇音

<http://nposone.org>

「蘇言機 日本で最初に音を記録・再生した器械」

日本音響学会誌 65巻2号 (2009), p.105

<http://www.asj.gr.jp/journal/pdf/museum14.pdf>

First Sounds

<http://www.firstsounds.org>

トーマス・エジソン国立歴史公園 (Thomas Edison National Historical Park)

初期の録音 (Very Early Recorded Sound)

<https://www.nps.gov/edis/learn/photosmultimedia/very-early-recorded-sound.htm>

1900年パリ万国博覧会 レオン・アズレーによる録音 日本人の音声

フランス国立図書館 (BnF) 電子図書館「ガリカ (Gallica)」

<http://gallica.bnf.fr/html/und/asia/cylindres>

IASA (International Association of Sound and Audiovisual Archives)

<https://www.iasa-web.org>

インターネット・アーカイブ (Internet Archive)

<https://archive.org>

国立国会図書館「れきおん」

<http://rekion.dl.ndl.go.jp>

NHK アーカイブス

<http://www.nhk.or.jp/archives/>

NHK 戦争証言アーカイブス

<http://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/>

NHK アーカイブス 番組発掘プロジェクト

<https://www.nhk.or.jp/archives/hakkutsu/>

ジョナサン・スターン 著

中川克志、金子智太郎、谷口文和 訳

『聞こえる過去 音響再生産の文化的起源』インスクリプト、2015年

<http://www.inscript.co.jp/b1/978-4-900997-58-5>

◆お知らせ◆

蘇音カフェ vol.3 「人間ではない声」

2017年9月23日（土）14時から 市民科学研究所事務所・十一人劇場にて

「初めて」の音、音声合成、ロボット、ヒューマノイドなどに関わる音声を聴きながら、人間ではない声の捉え方、人間らしさと音響技術のシステムへの関与との関係についてのおしゃべりをします。